

始原の歴史学を批評する

—想起される横浜の過去について—

阿部 安成

はじめに —「記憶」の氾濫から歴史批評へ—

I 確定された始原

II 始原の書法

III 散開する始原

おわりにかえて —始原という穴—

はじめに—「記憶」の氾濫から歴史批評へ—

「歴史資料への招待／受け継がれた横浜の記憶」——とは、横浜開港資料館の2000年第1回企画展のポスターにみえた文言である。横浜市が運営するこの歴史史料館はそれ自体が、1981年「6月2日の開港記念日に、日米和親条約が結ばれた由緒あるこの地に開設され」た記念物なのだった (<http://www.kaikou.city.yokohama.jp>)。歴史史料を展示するときに掲げられたこの「歴史」

と「記憶」の語が混在する文言はいったい、歴史を観せること=歴史をみること、にかかわる現在のなにをあらわしているのだろうか。

たぶんその「記憶」の語をおき換えて、「受け継がれた横浜の歴史」としても、なんのさしさわりもないだろう。なぜ「歴史」ではなく「記憶」なのかについてははっきりとした考察がこ

こからはほとんど伝わってこない。横浜開港資料館の広報紙である『開港のひろば』

(No.68,2000.5.3、No.69,2000.8.2) からこの企画展示にかかわる記事をみても、なぜ「横浜の記憶」

というのかは明記されていない。こうした宣伝と解説のあり方には、「記憶」の語が過剰なほど

に「氾濫」していると指摘される現状の一端が明瞭にあらわれている (岩崎 1998)。そして、ひ

とびとを館に招き寄せ展示を観せようとするとき、「歴史」の語を排除しながらも、しかし展示

するのはやはり「歴史資料」でしかないという奇妙な事態に主催者は無頓着であるようにみえ

る。「歴史」と「記憶」とは、かんたんにおき換えられてしまうほどに親和性のあるものではない。

い。

歴史家が無自覚のままに「記憶」の語を多用することは、使用者の思考放棄のあらわれであ

り、ひいては歴史学の自壊行為となるのではないだろうか。もっともさきにみた「記憶」の「氾

濫」を指摘した論者は、かかる事態が「歴史学というものの相貌すら変えてしまった」との印象

を述べていた。いまや「記憶」をめぐる問題

系は歴史家をして、「歴史は《これまでとはちがう何か》であるべきで、歴史家たる者は他の誰にもましてそのために働き、戦うことができるし、またそうしなければならない」(ル・ゴフ 1999/1988)と発言させ、それが「自己破壊の歴史哲学」(立川 1999)と評される事態を現出させている。歴史学がすっかり変貌したかはともかくも、曖昧にであれ「記憶」の語が多用される現状は学知や制度としての歴史学の変態を進めることとなろう。またそれが要請されているのである。

ただし「記憶」という問いは、過去をめぐる知のありように従来の歴史(学)とは異なるもうひとつの領域をつけくわえることではない。いまわたしたちが手持ちとする過去の認識や記述の仕方を問うているのだ。こうした批評という構えを明確にするためにも本稿では、ひとびとのうちに思い描かれた過去がどのように象形され記述され記録されるのか、すなわち〈想起〉という営為を考察の対象とする。そして横浜を議論の現場として、そこで想起される過去についての凡俗な記述をみてゆくことで、批評としての歴史叙述の可能性についていくつかの論点を示してみよう。

I 確定された始原

ひとにはそれぞれ祝い・祝われるべき大切な意味をもった日があり、それが毎年くりかえし祝われることがある。それとおなじように、町

や市にも祝福すべき出来事があると思われている。横浜のばあい、それは「開港」という出来事だった。横浜に港が開かれたのが、1859年7月1日(安政6年6月2日)。開港から50年めとなった1909年に、横浜開港50年祭が開催された。当時の新聞をみると、この50年の歳月のあいだに横浜は「帝国の冠港」になった、だからこの開港記念祭はただ「横浜一市の賀事」にとどまらず、「日本開国の大祝典」なのだ、と地元紙で喧伝されたのだった。あるいは、「横浜市民の身祝い、横浜の土地祝い、日本の開国祝いとして、有らん限りの方法を尽くして之を紀念し、之を盛祝するの奮発」がなくてはならないとの呼びかけは、この祭典をひとの一身上の祝いと同様に扱うようにと、ひとりひとりの市民にむけて祭典に臨むときのあるべき態度を示したのだった(社論「開港五十年」『横浜貿易新報』1909.1.1)。

開港50年を祝う祭典は記念日の7月1日におこなわれた。その中心となった催しは、市内の各町が意匠をこらして準備した山車の練り歩きであり、そのなかでも主役といってよいのが、本町の天照大神(1丁目)、神功皇后(3丁目)、八幡太郎(4丁目)だった。いずれも神話や国史のなかに登場するが、横浜とは取り立ててかかわりのない神や人物である。また、「開港」にかかわる人物としてよく取りあげられたのがマシュー・C・ペリーと井伊直弼のふたりで、「開港」を実現するための条約締結の端緒でそれぞれ任務を遂行した彼らは、国史上の第一級の人物で

もあった。

山車人形になった神やひと、雑誌の挿絵や絵葉書のなかで対の肖像となったペリーと井伊、さらにこのときただひとつ建造された銅像にかたどられた井伊掃部頭——彼らはだれひとりとして郷土横浜の英雄や偉人ではない。もちろん、横浜の偉人たちの顕彰がなおざりにされたわけではなかった。刊行された『開港五十年記念横浜成功名誉鑑』（横浜商況新報社）は郷土の偉人がたくさんつまった書物である。しかしそれは雑誌のなかに偉人を陳列したのであって、野外で群衆の視線の的となったのとはちがう。開港50年祭という祭典のステージにおいて、多くのひとびとの目にみえるかたちを与えられたのは、なにより国史にかかわる一級の人物なのだった。横浜の祭典でありながら、たとえば横浜市長の人形や肖像ではうまくないのだ。こうした事態は、開港の祝賀が同時に、開国の祭典となったことの明瞭なあらわれである。

この開港50年祭にむけて横浜市は、市の徽章と歌曲を制定した。市章となったのは、通称「浜菱」と呼ばれる、カタカナのハとマを組みあわせた記号である。これが書かれた紙や旗が、祭典がくりひろげられる市中に「日の丸」とともににちりばめられた。森林太郎（鷗外）が作詩した市歌は「わが日の本は島国よ」と歌い始めて、港のある「横浜」という都市がどのような空間におかれるのかを明瞭に示した。それは「日本」でなくてはならなかった。市街にひらめく市旗

の浜菱と国旗（と思われていた）日の丸もその視覚化された表現である。

こうしてみると、1909年におこなわれた横浜開港50年祭とは、横浜市民ひとりひとりを介して「横浜」と「日本」とがつながる、そうした言明を広範なひとびとのあいだに意識化させた横浜における歴史意識をめぐる空前の出来事だったのである。

ところでこの開港記念祭は、1859年の開港直後から毎年かさねておこなわれてきたのだろうか。たとえば、開港50年記念事業として1909年に発行された古老からの聞き取り記録である『横浜開港側面史』（横浜貿易新報社）には、「七十六翁某」が語った「開港一週年祭」の見出しに始まる談話がおさめられてはいる。たしかに、開港から1年が経ったその日に催しが執りおこなわれた。それは1年まえの出来事を記念した事業であることにまちがいはない。だがそのためには、地元の弁天社の祭礼を同時におこなう必要があった。しかも8月15日だった弁天社の例大祭のその日付が変更されてまで執行されたのだった。開港をめぐる記念祭はくりかえされてこなかったのだ。さきの見出しは、当時、開港1年祭がおこなわれたことをあらわしているのではなく、1860年のその日にあった出来事のがのちに開港1年祭として想起されたとみた方がよい。

この逸話はなにを報せてくれるだろうか。じつはひとの誕生日もいつの時代においても毎年

かかさずに祝われていたわけではなかった。それと同様に、横浜でも開港の記念事業を開催するなどといったことは、そうひとびとに馴染みのある行為ではなく、土地の鎮守の祭典と重ねあわせて執行しなくてはとても賑わいなど発揮することができなかったのだ。横浜の開港記念祭がすでにその始まり（1年め）からあったかのように想起された祭典だったということは、開港記念日は50年めにしてあらためて再発見された日であり、開港記念祭は50年めにしようやく執行された祭典なのだといえよう。いいかえれば、開港をめぐる記念日と記念祭とは、容易に創出も定着もなしえない難事業なのだった。

そうしたところこの1909年には、50年めという区切りのよさや、開港を自己の体験としえた世代の交替や、不景気からの脱出への希望、といった情況が、記念祝賀の実行をうながしたといえよう。たとえば『横浜貿易新報』紙上でくりかえされる「世の大不景気」「空前飛切りの不景気」のなかで、「市民の奮ひ起たんこと」（121）が目指され、そのためにも「横浜市民たる意気」や「横浜市民の面目」（528）が動員されて、「市の景気」「将来の進勢」（610）が望まれたのだった。横浜開港50年祭とは、横浜についての歴史意識の制作現場であり、同時に横浜市民にとっての〈市民であること〉〈市民になること〉の検証機会となったのだった。

横浜の進展は日本の発展と連動するといいうるがゆえに、いまや帝国となった日本と第一の

開港場と自称する横浜の現時の繁栄と、それを用意したこの50年の歴史がともに言祝がれる。するとこの発展の歴史を謳歌するためにも、開港以前の横浜は「一寒村」でなければならなかった。横浜の始原は、はるかな遠い過去に（ばあいによっては忘却の彼方に）もとめられたのでもなく、20年まえの市制が始まったそのときでもなく、それよりは少し古い50年まえの「開港」のときと定められ、それ以前と以後とでははっきりと断絶する横浜歴史が創成されたのだった。べつにいえば、「開港」を軸にしてこそ、「一寒村」から「港の数多かれど／この横浜にまさるあらめや」（市歌）といいうる「東洋一」『横浜開港側面史』の港湾都市となったという発展の歴史が肯われるのである。これを横浜の〈始原の歴史意識〉と呼ぼう。この歴史意識は、横浜の開港が取りもなおさず日本の開国であるというように、横浜の事跡が日本の事績となるという判定にささえられて価値化されたのである。

それでは、50年め以降はこの開港記念日はどのように祝われたのだろうか。もちろん数日の祭典をおこなったからといって、一気に市街と市民に活力がみなぎり、それが持続するわけではない。すでにその年のうちに祭典をふりかえてみても、「実に過去の五十年を送る」ようだと年越しにさいしていわざるをえなかった（『横浜貿易新報』1909.12.5）。記念日の意味がずれ始めている。開港から51年めとなる1910年の開港記念日に、その地元紙（7.1）は社論で、記念日に

は毎年かならず祝賀をおこなえといひながら、しかし7月1日とは、「市の記念日として年々記憶を洗濯」する契機として意義があるとみなしてしまった。くりかえし到来するこの記念日は、「開港」という過去からの栄えあるあゆみを想起するときというよりも、いわば将来へ・未来への発展をみはるかす展望台となったのだった。1909年のときには、開港記念日は継続可能な市の活力と発展をつぎの時代へと飛躍させてゆく梃子とされたのだが、早くもその翌年には記念日の役割が変わってしまい、それは選択された過去のなかの不要な・不適切な部分を消去するスイッチとなってしまった。

さて、横浜に市制が施行されたのは1889年4月1日のこと。通常ならば市といった行政団体は、市制施行の月日がその始まりのときとなるはずだが、横浜のばあいその始まりは4月1日ではなく、1859年7月1日（安政6年6月2日）の「開港」にあるとみなされた。

開港50年祭にさいして公認されたといつてよい横浜の始原の日を休日にするという。1918年の市会で、助役が示した議案「本市休暇日ヲ定ムルノ件」は、横浜市は東京市や神戸市とちがって市役所の開庁日ではなく、「港ノ開ケマシタ日」を「横浜市ノ謂ハベ誕生日」として休日にしよというのだった。この議案は異議なく可決し、横浜市の始原が開港であると市会でもあらためて確認されたのである。

さらに1928年の市会で、市長が提出した議案

「本市ノ開港記念日（七月一日）ヲ六月二日ニ変更スルモノトス」をめぐって、いったい開港の日付をいつとすることが適切なかが論議された。といつても、開港の日をまるでべつな日付にただ移すのではなく、太陽暦と太陰暦のいづれとするのかが論点だった。このときはたんに休日とするか否かを決すればよかったさきの議案とちがって、さまざまな意見がやり取りされた。そもそもなぜ太陽暦の7月1日の日付が採用されたのかの公文書が残っていないなかで、ひとびとの「記憶」のうえからいってももとの6月2日のほうがよいだろう——いや当時の市長たちが内務省に具申した結果として太陽暦の日付になったのだ——それは古い「記憶」にすぎない——わたしの「記憶」では市会に諮られていない、というように、その記念日をどのよう「記憶」としてとどめるか・どのようにとどめられてきたのかの論議が展開した一方でまた、太政官布達である太陽暦採用にしたがうべきであり、しかも開港の日は「大日本国ノ文明史ノ第一頁ヲ飾ツタ最初ノ日」として広く全国に知られているのだから、軽々しく変更してはならない——そう、太陽暦採用は「明治大帝ノ御意」なのだからそのままよいし、それが「歴史ニ適合シ…記憶ニ…適切」なのだ、といえ——「日本ノ歴史」では6月2日となっているではないか、それを尊重せよ、との応酬もなされた。

このときは開港記念日をめぐって、ひとつに

はそれをひとびとの「記憶」にどのように定着させるのか・しているのかについて、ふたつにその記念日をどのような位置におくのかについて、論議されたのだった。結局は市長の原案どおり6月2日への変更が可決した。おそらく、市長の提案事由の第3が意義をもったのではないか。すなわち市長は、この6月2日という日付に、まず震災復興の過程で域域拡張をおこない、周辺町々を合併(その日付は4月1日)して「大横浜」建設が実現した1927年の6月2日にその記念式がおこなわれたこと、さらに式典には秩父宮の出席があったこと、そしてその日は太陰暦の日付になる開港の日であること、こうした三重の意味を与えたのであった。

くりかえせば、ひとびとの「記憶」に横浜の誕生日である開港記念日どのように定着させるか・しているかがひとつの論点であり、そのためにも開港記念日をどのような位置におくのかを論議してみれば、市会議員のあいだでは、それを日本歴史のなかにおくことではほぼ一致がみられたのだった。いわば〈横浜なるもの〉と〈日本なるもの〉とのなれあい——これは開港50年祭のときに創成された横浜の始原をめぐる歴史意識の基盤である。しかしそのおき方をめぐって、詔勅を根拠に国家の政策である太陽暦採用にしたがって日付はいまのままでよいとする意見と、いや詔勅をも超えて6月2日という太陰暦での日付は絶対の重みをもつとの見解とが主張された。おそらく筋道からいえば、詔

勅を遵守して開港記念日の日付を太陽暦とするほうが時代の理にかなっている。しかし一方で、先祖の命日を太陽暦に変えたのかとのある議員の発言にはだれも反論のしようがなかった。太陽暦か太陰暦かの論議もただ暦法の問題だったのではなく、日付や時間がひとびとに生きられる意味をもつということがそこにあらわれたのであった。横浜歴史と日本歴史、そしてひとびとの「記憶」すなわち生きられた・生きられようとする過去が、横浜の開港記念日を要としてつなげられるのだった。

もちろんそれは提案者も予測していた事態だった。だから6月2日の意味に秩父宮の来浜がくわわっていれば(裕仁はまだ即位していなかった。秩父宮来浜は「市民」の喜ぶところだったと提案者はいう。秩父宮はいわば改善の代替者だった)、横浜の〈始原の歴史意識〉をささえる基準に抵触することなく、太陰暦の日付が採用できる。詔勅の尊厳も権威も皇族秩父宮への敬意と仰望により相殺されたといえよう。6月2日という日付は三重の意味をもって重くひとびとに迫り、しかし一方ではそれだけの意味を重ねなければ、市の記念日の定着など企図できなかったということになる。

開港記念日の変更には、開港バザーをおこなうのに梅雨のさなかよりもそのまえの方がよいという実利の理由もあがっていた。そうした効用を市民が喜んだかどうかはあきらかではないが、記念日の変更に対する反対はほとんどなか

ったといっってよい。

意味の重層性はさらに重ねられる。1923 年の大地震により「潰滅」したとみなされた横浜市がそこからの復興を宣言したのが、1929 年のこと。その年の 4 月 24 日には、横浜の復興を祝う市民祝賀式が催された。しかし翌 1930 年に制定された復興記念日はその日付ではなく、前日におこなわれた天皇奉迎式の 23 日が採られたのだった。震災からの復興を確認するものとして天皇は第一級の人物というわけだ。そして横浜市と市民にとっては市の休日ふたつとなり、ひとつの開港記念日は横浜の「誕生」を、もうひとつの復興記念日はその「甦生」を（『横浜貿易新報』1930.4.17）、あるいは順に「誕生」と「成年元服の祝い」（同紙 1930.4.24）をあらわすというように、両者はならべられて意味をもつ日となった。潰滅とまで表現された震災からの復興となれば、多くの市民にとって開港などくらべものにならないほどにわがことと感じられる可能性は拡大する。それとの組みあわせで開港記念日も称揚されたのだった。

こうした重ねあわせの表示はさらに、1979 年のときにその年は開港 120 年、かつ市制施行 90 年とあらわされ、10 年後の 1989 年は開港 130 年・市制施行 100 年となったのだった。

＊

横浜にとって祝われるべき出来事とはその始まりであり、それは開港なのだと確定された。

「帝国の冠港」「東洋一」の港都といいうる横浜

の始原は、はるかな忘却の彼方（日付の曖昧な過去）にもとめられたのではなく、はっきりと安政 6 年＝1859 年の 6 月 2 日だというのである。すると、始原のまへのそこは名もない混沌とした原野だったのだろうか。しかし事實は相違して、そこにはひとが暮らす横浜村があった。そうしたひとびとの生活の痕跡を抹消することはできない。となると、それは「一寒村」だったとかたづけられてしまう。始原の確定とは同時にそれ以前を貶視するという過去への暴虐だったのだ。

こうした歴史の暴戾は反逆をこうむるかもしれない。ところがほとんどそうはならなかったといっってよい。くりかえせば、日本の開国と連動する横浜の開港は、港都横浜の進展にとどまらず日本の発展の起点ともなった——といわれ、しかもわずかな家数で貧しくさびれた村が、世界にひろがる航路につながりそこを大船がゆききし、大勢のひとと大量のものが市街にあふれる都市になったという目のまへの変化が事実として感じられれば、始原のまへという過去にくわえられた貶視の虐待も、大横浜と帝国日本の現実のなかに解消されてしまう。たしかに『横浜開港側面史』に記録された古老の声には、開港後に展開したかつての横浜の破壊を嘆いた響きがあった（阿部 1999）。しかしそれが結集して開港後の時間の流れを押しとどめることはなく、横浜と日本の新展開のなかに消えてゆくのだった。時代を経ていまや、横浜を「東洋一」の港

都と呼ぶものはまずいない。しかし、「日本一の
外航船の入港隻数を誇る」(横浜市『市政概要』2000
年版)と書くことはいまやまない。

開港を始まりとする横浜の(始原の歴史意識)
はこののちも完全に廃棄されることなく、くり
かえし歴史記述の根幹にすえられてゆくだろう。
それは(横浜的)なちからの解放にも、またナ
ショナルなちからの跳梁にもうまく機能したこ
とだろう。横浜では両者が相乗しながら展開し
た様相が想定できるのである。

しかもその歴史意識の象徴としての開港記念
日には、いくつもの意味が重層して与えられた
のだった。まるで入れ子細工のように意味づけ
られた開港記念日は、それだけ多様にひとびと
がちかづきうる日とされた。しかし他方でいえ
ば、いくえもの意味がなければ機能しない装置
などほとんど死体^{しにがい}ではないか。もう立ち直れな
いのような体を呈している記念日をそれでも
生かしてしまうのは、ほかでもない、その始ま
りの日を希求するひとびとの心性である。

II 始原の書法

横浜の始原とみなされた開港を契機として、
港から新奇なさまざまな事物が上陸したという
事実がある。そこで、横浜においてその過去が
記述されるとき、「もののはじめ」と呼ばれるひ
とつの型ができたのだった。それは古くは『横
浜沿革誌』(太田久好、1892年)に始まるという。
その後の『横浜開港側面史』や『横浜市史稿』

(横浜市役所、1931-1932年)でもくりかえし事物の
由来がたずねられたように、いわば始まり探し
は好んでもちいられた横浜の歴史記述のひとつ
の型となった。この記述の型にのっとった、『明
治事物起源』(石井研堂、1907年)の横浜版という
べきいくつもの書誌が、1960年代から1980年
代にかけて上梓された。それは書名もそのまま
の『横浜もののはじめ』(横浜郷土叢書第1巻、横
浜市図書館、1961年)に始まる。横浜市図書館創
立40周年記念事業のひとつとして刊行された
本書は、それ自体が記念物でもあった。

図書館長による「まえがき」は、「わが横浜は、
名実ともにわが国の玄関」であると名乗りをあ
げる。「文明開化は、郷土横浜にはじまった」の
であって、「わが国民の生活全般に大きな変化
を与えた…西洋文化あるいは洋風生活の横浜に
はじまったものをまとめてみた」のが本書とな
った。外国郵便、外人劇場、貸自転車屋に始ま
り、ガス灯、西洋料理店、鉄道、ビール、ホテ
ル、ポンチ絵、理髪業、和英辞典といった、「文
明開化」と聞いて多くのひとが思い浮かべるに
ちがいない事物が、本書には49項目も取りあげ
られている。かつての沿革誌に頻出した「之ヲ
以テ嚆矢トス」という記述の型が、「もののはじ
め」ではたとえば、「わが国最初のガス灯がとも
された」「このようにして、横浜で、わが国では
じめての西洋野菜が栽培された」といったぐあ
いの定型文におき換えられて本書の各所に配さ
れたのだった。すでに「まえがき」にもみえた

ように、ここには 1909 年に創成された横浜の〈始原の歴史意識〉が素直に継承され、開港以後の横浜で初めての事物はかならずといってよいほどに「わが国の最初」として紹介されるのである。

横浜市図書館による『横浜もののはじめ』は、その後も改訂作業が続けられ、1974 年に「横浜郷土双書第 1 巻改訂版」として発行され、1977 年には「増刊」（増刷くらいの意ではほぼ同内容）を横浜市教育委員会が発行した。74 年版の「改訂にあたって」（図書館長）ではその理由に、市民からの再版の要望と「新しい事実の発見」による「従来の通説の誤りが指摘」されたことをあげている。「もののはじめ」には事実が書かれなくてはいけないという使命感から改訂版がつくられ、項目数が 50 となりその順序もならべ換えられたものの、「横浜もののはじめ」は、文字どおり横浜における最初の出来事であることは当然ですが、それはまた、わが国においてもはじめてのことを意味しています」と書けば、これは改訂版とはいえやはり歴史の見方においては、横浜の〈始原の歴史意識〉を継ぐものと報せているのだった。ならば、新事物が「日本国内のすみずみまで」ゆきわたったと陳べうるのも、「玄関」に位置するという横浜ならではの自負なのだった。

77 年版になって、その冒頭に革新市長による「あいさつ」がおかれても、事態は少しも変わらなかった。「あなたがたが主人公である横浜

が日本文化のさきがけとして重要な役割を果たしてきた歴史を見直していただきたい」と告げる。「見直せ」とは、歴史の見方を「改めよ」ではなくその意義を「改めて確認せよ」と読者に迫っているのである。

さて、「もののはじめ」という横浜歴史は、どのように記述されたのだろうか。ひとつには、天皇の影というべきものがある。たとえば、「牛乳しぼり」についてみよう。「わが国最初の邦人経営の牛乳しぼり業」をおこなったものはまた、「白牛五頭を宮城内につれていき、吹上御門内で牛乳しぼりの模様を、天皇の御覧にいらした」という。この「牛乳しぼり」の項の書かれ方は、74 年版以降にも継がれている。あるいは、初版になくとも二版の 74 年版から追記された例もある。それをたとえば「ガス灯」についてみると、「明治天皇皇后親シク点火模様ヲ観覧アラセラレタリ」とのガス灯の記念碑にみえる刻字が引用されたのだった。もちろん当たりまえのことだが、横浜発祥の事物すべてに天皇が目をむけたわけではない。だが可能なかぎり天皇とのつながりが探られ、天皇にみられた事物はより意味のある「横浜もののはじめ」として際立たせられるのである。べつにいえば、「横浜もののはじめ」についての第一級の確認者として天皇の視線が要請されたのだ。ただし、「横浜もののはじめ」にはつねに天皇のすがたがそこあるのではなく、ときおり影のごとく寄り添うかのようである。それはまた一方で、「これがわが国

の「—のはじめである」という定型がくりかえされる「横浜もののはじめ」という単調なストーリーに抑揚をつけるだろう。

もうひとつは、「—のはじめである」という定型のなかにとときどきみられる微妙な相違である。たとえば、「これがわが国最初の貸自転車屋であるといわれる」といった伝聞のままに書く——写真屋についてみられる「東では下岡蓮杖、西では上野彦馬といわれ」のような異聞をならべて書く（それでも続けて「どちらがはじめてであるかははっきりしないが、東のはじめは下岡蓮杖である」と最後には断定する）——「おそらくこれがわが国最初の…」という推定で書く——そして鉄道にかんしては奇妙なといってよい記述が展開する。すなわち、1853年長崎に入港したロシア軍艦にあった蒸気車の模型は、「これが日本人で、蒸気車の模型を見た最初」とされてしまい、1854年にペリーが献上した「蒸気車のひながた」が、「これが日本人を乗せて蒸気車が走った最初」になってしまう。後者の場所はもちろん横浜である。

鉄道の始まりに模型をあげ、長崎のほうがさきかという、しかしそれは船舶のなかから外へはでていないし、くわえて「日本人」はそれに乗らずにみたにすぎないのだから、「もののはじめ」の尊称はやはり横浜に授けられてしまうのである。または、ポンチ絵も『ジャパン・パンチ』が「文久二〔1862——引用者、以下同〕年四月、横浜で創刊された漫画雑誌」と紹介さ

れながらも、「わが国最初のポンチ絵雑誌」の栄誉は仮名垣魯文が1874年に横浜で発行した『絵新聞日本地』に与えられ、ワグマンの『ジャパン・パンチ』は「日本のポンチ絵の発達〔の〕…はじめ」といわれるにすぎないのだった。

「洋風建築」も「わが国で日本人によって造られた純洋風建築のはじめ」こそが「横浜もののはじめ」として特筆されるのである。

伝聞、異聞、推定、ついには捏造まがいの「はじめ」探しはなんとも健気の至りだが、それはなんとしても「わが国最初」を横浜にみつけようとする熱情の発露ともいえよう。しかもそこでは「日本人」の事跡が特化されたのだ。「日本人」以外によるさまざまな事物の導入や紹介もかならずあった。たとえば、よく知られたバラ（キリスト教宣教師、シモンズ（医師）、パーマーとブラントン（建築設計士）の事跡があり、彼らの功績も記されてはいる。その一方で、「日本人として、新聞広告を出したはじまり」「わが国で日本人がマッチを製造したはじめ」などを列挙し、できるかぎり「日本人」の偉業が顕彰されるのである。

事実を精査するはずの改訂版（74年）でも記述の奇妙さはなくなる。さきにみた写真屋をめぐる、ここでは「横浜では下岡蓮杖だといわれている」と「もののはじめ」探しの欲望が剥きだしとなり、その始まりが記されただけだった軍楽隊については、その創始者のフェントンはまた「君が代」を最初に作曲した人で、

…〔それが〕東京での天覧調練の日に、はじめて演奏された」事跡も紹介される。続けて「軍楽隊と君が代発祥の地である妙香寺には、いま「国歌君が代由緒地」の碑がたてられている」ことも報される。発祥も由緒も同義だが、東京初演と数行まえに書いたことを改訂者は忘れたようだ。つまり「横浜もののはじめ」とは、横浜で最初、「わが国」では二番め、あるいは、「日本人」として最初、でもさがしは「外国人」では意味をなさないのである。

横浜の正史を市役所が発行した『横浜市史』（1954-1982年）とすると、しかしそれが充分に取りあげていなかった日常生活のみちかな事物にかかわる歴史を、この「横浜もののはじめ」という型の歴史記述が補ったといつてよい。正史ほどの大部でもなく専門知識も必要としないで読めるこの補遺は正史の庶民版となり、手軽に図書館などで手にできる横浜歴史への手引きであり、しかも読めば横浜市民の矜持をくすぐる「はじめ」の物語が、いくつものアイテムに即して綴られている。伝聞、異聞、推定を排除せずに「もののはじめ」を探索する姿勢は、文書史料による実証性には完全に依拠しない——したがって、想い起こされるいわば生きられた「もののはじめ」といいうる過去のたどり方の可能性を示してみせたともいえよう。

それはまたべつに言えば、「はじめ」を「わが国最初」といいうる横浜ならではの自負の輝きと使命の重さのあらわれでもある。しかし他方で、

その自負を自覚し使命を遂行するなかであらわれたいわば黒い^{ダークな}熱情が、ひとつに「日本人」ではないものの功績を、ふたつに「横浜」ではない場所（自治体）での事跡を排除したのだった。

「横浜もののはじめ」という歴史の書き方は、横浜市が発行するグラフ誌である『市民グラフ横浜』（横浜市市民局編）でも特集（No.14,1975）が組まれたように、1960-1970年代に活況を呈したといつてよい。その後、「横浜もののはじめ」の提示はどうなったのだろうか。

1988年には、「横浜もののはじめ」にかかわる書籍が2冊発行された。ひとつは『横浜ことはじめ』（半沢正時、神奈川合同出版、もうひとつが『横浜もののはじめ考』（横浜開港資料館ほか編、横浜開港資料普及協会）である。前著は「もののはじめ」の項目が64に増えたものの、先行する書誌とほとんどおなじ書名は、それらと内容があまり変わらないことのあらわれでもあった。

「まえがき」をみれば、「横浜ことはじめ」に多くのひとが興味を寄せるだろうが、「内容が不確か」という欠点もあるので、「客観的な証拠を求め、それを比較検討して検証していかなければならない」と、歴史記述をよりたしかな事実の集積へと修正してゆくことの必要が述べられる。しかしこの「ことはじめ」は、すでに3冊もある「横浜もののはじめ」の書誌と文章までもほとんどおなじなのだった。杜撰といえればそれまでだが、事物の項目とその記述についていくぶんの変更と修正がくわえられながらも、

しかし歴史の見方は既存書誌のそのままなのだった。

くりかえされる「横浜もののはじめ」にかかわる書誌の上梓は、歴史の見方には少しの変更もなく、「事実性」の精度を少しでも高めてゆくことが目指されていた。そうしたなかで横浜開港資料館が編集した『横浜もののはじめ考』は、書名があらわしているように「横浜もののはじめ」の問い方それ自体をも考察の対象とした。これまで論述してきた「横浜もののはじめ」にかかわる書誌公刊の展開のなかでは希有な一書といってよい。それではこの書は、どのような問い直しをしたのだろうか。

本書はまず、「横浜もののはじめ」とは「幕末開港後、横浜を舞台として展開された、外国文化摂取の種々相」と定める。ここでの主役は「庶民」だという。そして明確に設定された「横浜もののはじめ」は、あらかじめその定義の外へふたつの項を排除する。ひとつは「外国人」。「新文化の紹介と導入に務めた多くの外国人がいたことを忘れてはならない」と前置きをしたうえで、「十分な予備知識もなく、熱意と努力と幸運だけをたよりに、新文化と取り組んだ多くの日本人の事績」をこそ興味の対象とするという。

「外国文化摂取」といえば長崎を忘れるわけにはいかない、「元祖争い」となると長崎は強敵だ。しかし「本書では、この問題にはほとんど触れなかった」という。なぜか。「横浜を舞台とする外国文化の摂取だけを問題としているから」が

解答である。排除の第二は横浜以外の土地での

「はじめ」だった。場所を横浜に限定しそこを特化する、そして「日本人」の功績を顕彰する、これは前述した既刊の「横浜もののはじめ」にみられた書法のくりかえしである。さきに黒い熱情とわたしが呼んだその陥穽に、『横浜もののはじめ考』の編纂者も無自覚である。

それでは、本書はどのように「横浜もののはじめ」批判を展開するというのだろうか。ひとつは庶民性とかかわる。ほとんど「回顧談」として伝えられる庶民の事跡は、「かろうじて記録に留められた」にすぎない。だから「史実性」、なかでも「いつ」にかかわるそれが不確かである、と「もののはじめ」の記述にみられる難点を指摘する。「回顧談に基づいて「何が最初か」を判定するのは危険である」とまで宣告する。したがって本書は記述にあたって、典拠を明示すること、史料批判を怠らないこと、曖昧な事柄には不明であると明記すること、を編集の指針としたとうたった。談話者のこころのなかにわずかな細い糸でつなぎとめられたかすかな過去の残像は文字としてはなかなか残らない。そうした不確かな証言はできるだけ排除する、それしか手がかりがないときは徹底して検証するか、どうにもゆきづまればわからないと率直に告白する——との態度で歴史記述に臨む本書は、「もののはじめ」の記述に「決定版」はなく、つねに「書き直しが必要」であり、それはまた「歴史研究の常」だという鉄則をみせるのだっ

た。すでに先行する類書が複数あるなかで、『横浜もののはじめ考』こそが現段階での実証性を徹底させると宣言したのである。

もうひとつは、「もののはじめ」という過去のたどり方によって構成される「横浜像」への批判である。「もののはじめ」に関心が寄せられその探求が好まれるなかで、「文明開化のふるさと」という横浜像がつくられる。しかしそうした「外国文化の摂取」は横浜の一面でしかなく、それとはべつな面として「保存され、発展させられた日本固有の文化もあったはずである」と仮定する。つまり横浜をその多面においてあるいは全体としてみようとするとき、横浜は「国際色豊かな都市」としてすがたをあらわし、そこでは「さまざまな民族が固有の文化を失うことなく、共存していた」のであり、また「国際文化都市」としての横浜は「日本趣味の豊かな町でもなければならなかったのである」——という横浜像をみせるのだった。横浜は「外部」と「内部」の両面からみなくてはならない、外部からするとそこは「文明開化のふるさと」とみえるだろうが、「内部からそれに迎合するのは、卑屈でないとすれば、横浜の文化的な伝統に対する無知である」とその糾弾はきびしい。

記録された「はじめ」をめぐる「史実性」と、それにかかわる横浜像の「一面性」、このふたつが『横浜もののはじめ考』が既存の「もののはじめ」という横浜歴史の記述にむけて発信した批判の要点である。

* *

「原資料に基づいて…できるだけ正確」な記述をこころがける（『横浜もののはじめ考』）。これを編集の作法として記述を進める態度に、科学性を是とする歴史学からもいいが寄せられることはまずないだろう。注文は「事実」の訂正だけとなる。「横浜もののはじめ」にかかわる類書はいずれもほぼ一貫してこの態度を掲げていた。賛辞が寄せられるであろう実証科学の一例となる横浜歴史の記述は、おもに文書史料にのっとって、伝聞や推定にまわりつく曖昧さを摘除してゆく。

それは同時に、ひとびとの想起のなかの「もののはじめ」べつにいえば生きられた過去や歴史をいくらかであれ排除することを意味する。不適切とされる過去が排除される一方で、『横浜もののはじめ考』をみれば、多面性への視点を標榜するなかで、仮構された当為であったはずの横浜像が「事実」とされてしまう。一面より両面、さらには多面の方が視点としてはよいとひとまずはいえる。だが本書では、「国際色豊かな」とは「日本固有の文化」など個々の外国文化や民族文化があつて初めて成り立つといっていることになる。いいかえれば、目に心地よいゆたかな「国際色」とは、文化を^{ナショナルリタイ}民族や国籍により分別できるという証しとして塗られたにほかならず、あたかもさまざまに彩られて梱包された「文化」のパッケージが港から自在に輸出入されてゆく様が想像できるというのだ。その

現場が横浜となる。おそらく白と赤に彩られた包みに「日本趣味」や「日本固有の文化」が詰まっている。そして、けして具体性をもって述べられることのない「横浜の文化的な伝統」が、言辞のうえでいともかんたんに「日本固有の文化」と接合されてしまうのである。従来の書誌では「わが国」のなかで称賛されてきた「横浜もののはじめ」が、まるで最新=再審の当該書では国際性をまとった万国博覧会のアリーナに展示されたかのようなのだ。万博会場のなかのアドレスは、日本館のYOKOHAMAブースである。

さて、いまはもう『横浜もののはじめ』も『横浜ことはじめ』も図書館での閲覧を除くと入手困難となるほどに、その公刊からの年月が経ってしまった。ならば古さゆえの瑕疵として、ここまでわたしが論じてきたことは廃棄してもよいのだろうか。

初版から12年を経て、2000年夏に『横浜もののはじめ考』が改訂された。しかし新版のそれはあくまで「史実」をめぐる改訂をおこなったのであって、したがって実証性は強化されたのだろうが、国際性のなかで「日本文化」を揚言して〈横浜的〉かつナショナルな矜持の励起に実証科学を活用する書法には、少しの修正もみられないのである。ここでの記述者は、歴史を書く前提作業としての実証を徹底させながらも、記述の型を不問にふしたがゆえに、歴史像の提示において横暴なふるまいをみせたことに気づかないのだった。

もっとも編者の横浜開港資料館は、「日本の開国と横浜の開港をめぐる内外の歴史資料を集め、広く展示・公開し、世代間の交流と市民相互のふれあいを高めることを目的」とするとウェブ・ページに自書する機関である。その成果ということなのだろう、「修学旅行や施設見学にも広く利用」されていると自恃を隠さない。市営の歴史史料館にとっては、かつて20世紀初頭に創成された〈始原の歴史意識〉をささえる日本の開国=横浜の開港という言述が自明のこととされている。その創成からもう100年が経とうとするいまも生命力を保つ横浜の始原をめぐる歴史意識があり、それが木乃伊のように干からびていないとすると、相互にふれあうという「市民」とはだれのことなのだろうか。「市民」の差異は「世代」のあいだにだけあるのか。

その歴史史料館が、「横浜と上海——二つの開港都市の近代」(1993年度第2回企画展示)や「横浜中華街——開港から震災まで」(1994年度第3回企画展示)を主題とする企画展を開催したことはわたしも知っている。ではそうした展示を実施した成果は、〈横浜的〉かつナショナルな矜持とどのように折りあいをつけたのだろうか。あの自負への欲望は「開港」以降の「横浜」の「日本人」の功績をたたえ讃え、これは同時に記述のなかでひとつに「日本人」以外のものたちの事跡=歴史にむけられた暴力だったのではないか。〈横浜的〉かつナショナルな欲望の処理が、だれに・どのようなしわ寄せとなってあらわれ

ているのか。展示でそれをあらわす術が探られているのだろうか。横浜における 1988 年の実証歴史学はその専横をあらわにしたというのが、わたしの診断である。

III 散開する始原

始原としての開港こそが〈横浜的〉かつナショナルな欲望をあらわにしている。開港という始原は、横浜における歴史記述において磐石の位置を確保したようにみえる。だが、どの歴史記述者もたったひとつの始原をたどること・そこから書き始めることに耐えてこられたのだろうか。いってみれば、「横浜もののはじめ」とは、開港というひとつの始原を細分化させたのであって、それはもしかすると、ひとつではない始まりを書くことに潜む抗いがたい誘惑のあらわれなのかもしれない。始まりはどのように書かれるだろうか。

横浜市役所の公式広報誌である『市政概要』（2000 年版）をみると、その「横浜のあゆみ」の頁には「開港前」の見出しのもとで、「文献でたどることのできる横浜の起源は、11 世紀までさかのぼること」ができると書かれ、見出しは「開港」「市制施行」へと続く。一方おなじ頁の「歴史年表」は、1854 年の「日米和親条約（神奈川条約）を締結する」の項から始まる。文献史料にもとづく実証という作法をふまえれば、開港よりはるか昔の 11 世紀にまで「横浜のあゆみ」は遡ることができるが、しかしやはり横浜とい

えば「開港」を記さずにはいられないというわけだ。とはいえ年表にしてもじつは「開港」に始まるのではなく、条約締結がその第 1 項となり、ついで「日米修好通商条約を締結する」がおかれ、そのつぎの第 3 項としてようやく「横浜が開港（陰暦 6 月 2 日）される」と記されている（この記述は少なくとも 1994 年版にまで遡れる）。横浜の起点を記述するときのこの曖昧さ——べつにいえば横浜の始原が複数ありうることをこの頁は報せている。

開港 50 年祭のときに創成された、〈始原の歴史意識〉は、ときに横浜歴史の絶対の見方ではなくなり、より遠い過去へと時代がたどられ、さらなる始原をもとめて歴史が遡及されてゆくのである。こうした事態はしかも、『市政概要』に特異なではなかった。

すでにみたように 1989 年は開港 130 年・市制施行 100 年をかぞえる年であり、それを記念して横浜市は『図説【横浜の歴史】』（横浜市民局市民情報室広報センター）を刊行した。1989 年は「^マ市政一〇〇周年。新たな世紀のはじまりとなるこの歴史的な時」であり、まさに「横浜は今、未来に向かって大きく飛躍しようとして」いるこのときにあたり、「横浜を愛する皆さんの心の道標として」（市長）刊行された本書が市民に提供されたのだった。

愛市の道しるべとなるというこの図説通史をひらいてみよう。市長挨拶よりまえの頁にある 7 つの扉とその頁の写真をみると、挨拶の直前

がまさに現在である1989年。それは「【至福千年】への旅」と題された21世紀という未来への門口であり、そこから頁を逆に遡ると、1974年「トイレットペーパーが消えた日」、1950年「風に吹かれて逆立すれば」、1934年「シネマ帰りにイセブラ」、1929年「市民の塔は残った」、1889年「ヨコハマシ サクラ サク」——となり、時間の流れに順えばすなわち横浜歴史が、市制施行→震災潰滅→震災復興→戦後復興→オイルショックとたどられ、そして最初の扉はというと、1853年「黒船、鎖国の扉を叩く」(＝ペリー来航と「動乱劇の幕開け」)が設けられたのだった。時間の間隔が不均等に劃されたのはもちろん、記すべき出来事の生起に即するからではあるが、いずれもとくに横浜(市)にかざられはしない出来事によって時期区分がおこなわれている。横浜(市)の歴史といいながら奇妙ではないか。いってみれば、これは日本史年表でもある。

さて、この図説通史は横浜の始原をどこにおいたのだろうか。第5章をみると、「横浜市の誕生(市制施行～第一次世界大戦)」と題されている。市の「誕生」となればそれは当然のこと、1889年の市制施行のときとなる。こうした章題にみあうように本書では、第5章以前の章や節の表題に「誕生」の語はみえない。本書の章立てにおいては唯一、市制施行に「誕生」の語の使用が許されたのだった。だが横浜市の始めを記した本書の頁を逆にくくってゆくと、その「誕生」の語が本文で使われていることに気づく。

すなわち、「港都横浜は、日本初の日米修好通商条約の締結によって誕生した」(「開港場建設と地方名主」p.190-191)というのだ。矛盾ではないかというともうでもないだろう。よくみれば、横浜市の誕生と港都横浜のそれという微妙な使い分けがここにはある。いわば港都横浜と横浜市とはよく似た姉妹というわけだ。とすれば「誕生」をめぐる複数の記述は解決が容易だ。港としての横浜、市としての横浜は、それぞれ始まりがべつといえよいいのだ。

一方でまた本書では、「横浜の地名の初見」もたどられ、第2章「動乱の時代を生きた人びと(鎌倉時代～戦国時代)」の扉で、それが1442年の「比留間範数らが宝金剛院に横浜村の薬師堂免田畠を寄進する」の項に付記されている(知見が広く、注意深く書物を読むものは、『市政概要』とのちがいに気づくだろう。『市政概要』にいう文献をとおして11世紀にまで遡られたという「横浜の起源」とはなんだったのだろうか)。

市の始めも地名の初めも記した本書では、「横浜」の語はどのくらいの過去の記述にまで使用可能なのだろうか。くりかえせば、その初見は15世紀中葉と報されていた。しかし節題をたどってみても、14世紀のことを記した「内海交通と横浜」(p.102-103)、13世紀を対象とした「鎌倉幕府と横浜の開発」(p.86-87)のように、「横浜」の語は本書が地名の初見と教えた時代以前にも遡り、さらに12世紀に至っても「保元の乱と横浜の武士」(p.74-75)のように、「横浜」という名

称を使った節題がかんたんに許されるのである。もちろんだれも13世紀の歴史記述に「横浜市が…」と書きはしない。それではここにいう「横浜」とはいったいなんだろうか。こうした歴史記述にみえる「横浜」の語の遡及は12世紀にとどまらなかった。

「横穴古墳は、横浜市内の各所に存在する」
 (「鮎川流域の横穴と製鉄」p.60-61)——これは許されるかもしれない。現在もあるいは本書刊行の1989年の時点には確実にそれが市内にあったのだから。では、「今から一五〇〇年まえのある日、田園都市線市ケ尾駅の南にある朝光寺原の一角で、葬いの儀式が行われた」(「甲冑をつけた武人」p.52-53)との記述に目眩するのはわたしだけだろうか。参会者は市ケ尾駅から歩いたのか?などと問うのは野暮の骨頂というもので、大人げない挙げ足とりとこちらが難詰されるかもしれない。ただ書き方が下手だったのだから、
 「いまは、横浜市内となった場所の各所に…」
 「いまでは、田園都市線市ケ尾駅のおかれた南にある…」と書き直せばよいだろう!と開き直られたとしたら、それでかたがつく珠のきずにすぎないのだろうか。

図説通史のあちこちに点在する奇妙な記述。縄文時代に遡っても「この時期の遺跡は、市内でもわずかに数か所しか知られておらず、市域の人口はまだごく少なかった」(p.33)と書かれ、そして本書第1章「横浜の、ずっと大昔(先土器時代～平安時代)」の最初の見出しは、「横浜

の歴史を切り開いた人びと」(p.24)と題され、「市内で最も古い遺跡」の存在により「横浜の歴史は二万二〇〇〇年をさらにさかのぼる」と報せる。さらにその項のなかで紹介された、「最近になって、横浜の背後に続く多摩丘陵の一角で、武蔵野ローム層の中から約五万年前の中期旧石器時代の遺跡が発見された」事実にもとづいて、「今後市内でも彼らの足跡が確認されれば、横浜の歴史の始原はいっきよに倍近くもさかのぼることになるであろう」と「新発見でふくらむロマン」(p.25-26)に文字が踊るのだった。市制施行も開港も地名の初見もどこへかふとび、「ロマン」などという甘いさやきで読者は5万年まえの横浜の始原へと誘拐されるのである。開港50年などという記念の仕方のなんとさややかなことか。

本来、本というものは初めから読んでゆくものであって、『図説【横浜の歴史】』と題された通史をその頁の順に読み進めてゆけば、第1章の「先土器時代」の書きだし——「横浜の地に遠い祖先のくらしが始まったのは、いつごろのことだったのだろうか」との問いに導かれ、読者はあまり違和感なく時代を読みくんだり、やがて条約締結、開港、市制施行、そして現在というひとつながりの横浜歴史を知ってゆくだろう。しかも1989年という現在は「至福千年」への始まりというのだ。太古のロマンが未来のユートピアにつながる歴史記述は、それがただちに愛市への道標となるかはともかくも、少なくとも

読者の神経を逆なですることはないだろう。447頁の本書を一気に通読できたなら、あとには心地よい疲れが残るかもしれない。

しかし横浜市の「誕生」である1889年から、港都横浜の「誕生」のときという条約締結の1858年、地名横浜の初見の1442年、横浜市域の人口が少なかったという縄文時代、横浜でひとのくらしが始まったという先土器時代、と通史を遡って読んでみると、現在に至る横浜歴史を太古の始原からひとつながりとして記述する展開がなんとも奇妙にみえないだろうか。「遠い祖先」とはだれのなのか、その暮らす地はどこと呼ぶのだろうか。先土器時代に「横浜の歴史を切り開いた人」はほかでもない、その歴史記述の書き手ののだが、まるで当時のひとびとが「横浜の歴史を切り開いた」かのようにかんたんに書かれてしまうのだ。

* * *

すでに正史も完結し（じつは横浜では最新の正史編纂が始まったのだがそれはおく）、その後の調査と研究の成果もおそらくふまえられて、先土器時代から現代に至る横浜歴史が愛市を喚起するための教本として提供された。大部の本書は頁ごとにかならず大小の図版を挿し込んで、読書が退屈となっても読者に本書を手放させない工夫が仕掛けられている。しかしここには新入りの市民であれ地つきの浜っ子であれ、ひとびとが切実に想起する過去が入り込む余地がどれほどあるだろうか。むしろ執筆者は文書と遺物すな

わち歴史学と考古学にのっとして過去の「事実」を実証し、その集積あるいは連係として通史を執筆したといつてよい。

本書腰巻は、「“人間＝市民の生活”を追いかけた迫力あるビジュアルが、あなたを歴史の目撃者にする」と読者に呼びかける。歴史学と考古学によりきちんと裏打ちされた記述をとおして、確かな実証性の徹底した横浜歴史を読者は「目撃」することだろう。そしてまた腰巻にある記述——「横浜の歴史は大きな変化をとげた。農漁村から大都市に、貿易の中心から京浜工業地帯の中核へ。全国と世界との密接なつながりをもって発展した」（横浜市立大学名誉教授）——すなわち「事実」としての、飛躍発展した横浜、日本と世界の紐帯としての横浜、を知るといえ、これはいったいだれの耳に心地よく聞こえる横浜歴史なのだろうか。横浜歴史を飛躍の相で描き、しかも日本のみならず世界の位置におく、（一見すると世界史のなかの日本、一国史を超える地域史、という命題が思い浮かぶが）、これは「横浜ものはじめ」という型のとりの記述である。その型にまわりつく〈横浜的〉かつナショナルな欲望と本書のつくり方や書き方とは、いったいどれくらい隔たっているのだろうか。

かかる欲望をべつに俗言すれば、より大きく・より堂々とした歴史への熱望ともなるだろう。腰巻にいう「飛躍」と「世界」という言葉が、本書を推薦するほかのフレーズである「横浜ファンへの壮挙」（評論家）「歴史旅行を楽しも

う」(ジャーナリスト)「歴史を生きた人々のドラマ」(脚本家)とそう変わらない読者への誘いの槌子とすれば、「世界とつながる横浜の歴史」も偉大な歴史を希求するところをいくぶんかはくすぐったかもしれない。

しかし歴史家であれば、ただそうした欲望や冀求の侍女となることはないというだろう。きちんと徹底した実証がわが仕事であり、歴史の偉大さなどとは一線を劃すると述べるのが科学にのっとった歴史研究者の矜持だろうから。

それでは、より古い過去・より長い歴史とは歴史記述者にとってなんだろうか。『市政概要』は「横浜のあゆみ」を11世紀に遡らせたし、『図説【横浜の歴史】』は読者に5万年まえの「横浜の地」を夢想させた。前者は文献にのっとり、後者は周辺の遺物にしたがって、つまり歴史学と考古学による実証(とその可能性)が横浜歴史を、市制施行よりも開港よりも条約締結よりもさらに遠い過去へと遡及させたのだった。それは生涯がたかだか70年くらいのひとに想起できる始原の古さでも想像できる時間の長さでもない。しかしそれも「横浜の歴史…」などと書かれることによって、どこかみちかな出来事のように思われることもあろう。こうしてふくらませられた「ロマン」は、「文明開化のふるさと」横浜というイメージと同等に、あるいはそれよりも強くひとびとの琴線にふれるだろう。かかる探査のゆきつくさは容易に想像がつく。「わが国最古の…」「日本最古の…」という型で言祝

がれる歴史の榮譽である。この列島に国家などもちろんなく、その地名すら曖昧な太古の記述に「日本」の語の使用が許される、いやそれがもとめられる事態はすぐそこなのだ。

開港と市制施行を記念して編まれたこの図説通史は(そもそもこの記念の仕方からして)、横浜にとってただひとつの始原である開港という認定と、それから派生する歴史意識から一見したところ自由であるかのようだ。市の始まり、港の始まり、地名の初見＝横浜と名指す始まり、生活の痕跡＝ひとの暮らしの始まり、というようにいくつもの始まりがあるとみせることが(図説通史の執筆者や編集者の意図はべつにして)、横浜の〈始原の歴史意識〉と連係する〈横浜的〉かつナショナルな欲望への対決手段となる可能性を示しているかもしれない。狡猾なその欲望の侵犯にむけて、横浜歴史はみずからのうちにそれへの抗体として、いわば〈始原の散開〉を展開して戦闘に備えたと喩えてみよう。

ところが、歴史を書く前提作業としてある文書や遺跡に依拠した実証の精度を高めることに安住して、住民の想起や想像とはまるで無縁に、しかし〈市民〉の誇りを讃え、さらに「わが国最古の…」を渴望する広範なひとびとの関心を引くにちがいない太古の始原を遠望させてしまえば、かかる歴史記述はやはり〈横浜的〉かつナショナルな欲望の掌のうちだといわなくてはならない。過去を再構成させるために実証を徹底させても、その歴史を示すことの意味を自問

しなければ、実証性と科学性によって構築された堅固な歴史学は、ひとびとの「過去へ向かう心」『歴史学研究』574)を自らの外へと排除するばかりである。実証歴史学の成果である1989年版横浜通史は、「生きられた過去から正統性を奪う」(ノラ2000/1984)という横暴をはたらいたのだ。

「いまは横浜の地となったところに遠い祖先のくらしが始まったのは、…」と書き直せばよいのではない。けして「横浜」とは呼びえない場所であっても、ひとの生活が可能なきがかったという、あたりまえのことを知らなくてはならないのだ。そして「横浜の歴史を切り開いた人びと」を無限定に古い過去へと追いつめてはならないのだ。

おわりにかえて 一始原という穴—

てぢかな辞書では、歴史を「人間社会が経て来た流動・変遷の姿。その記録」と説く(『岩波国語辞典』第6版、2000年)。いいかえれば、歴史とはひとびとにとっての一連の出来事とそれを書いた記録のこととなる。ここで歴史なるものへの考察を区分けすると、ひとつに、一連の出来事をめぐってその始まりはどこか・なにか、一連というとき出来事はどのようにつなげられるのか、ふたつに、その出来事はだれにとってのそれか、みつつに、経たことどもをどのように書くことがよいのか、といった問いが立てられるだろう。

すでにみたように、横浜歴史が書かれるときその始原は複数ありえた。では、横浜に住むものにとって、どのような始原が思い描かれ、それはどのように記録されただろうか。たとえば、前述した聞き取り記録である『横浜開港側面史』はその始まりに「昔の横浜村」という項を立て、そこに収録された談話のひとつは「二〇〇年前の横浜」と題された。それは談話者の先祖がかつてこの地に移り住んで開墾を始めたときから語り起こされた家と土地の歴史である。そこに住むものにとっての家と土地の歴史は、その家やひとの数ほどある。どのような史誌もそのすべてを載せることはしない。そうしたなかで、個別の家の開墾という事跡が聞き取り記録に掲載されたのも、それが「横浜」の草分けを報せる出来事であるからにほかならない。開墾にむけられたひとの発奮と汗が家の事績と土地の始まりとして、そして横浜歴史のひと齣として書かれ、それがまた〈横浜的〉な矜持のひとつとなるだろう。土地の開墾は当事者である家にとっての切実な過去となり、同時に横浜歴史にとっても記されるべきひとつの始原となった。

『横浜開港側面史』を編むにあたっての聞き取りとは、開港後50年の現時から50年まえの開港のころを想起せよとの強制的な謂であり、それは開港以前の過去をも語る可能性を開いてしまった。横浜の〈始原の歴史意識〉を基幹にすえて編纂されたはずの『横浜開港側面史』には、開港をただひとつの始原とする歴史意識からは

ずれる事例が書き込まれていた。すなわちこの聞き取り記録は、横浜の開港をめぐる〈始原の歴史意識〉が虚偽であることをみずからのうち記していたのだった。聞き取りとその記録化という作業には、複数の始まりが個別にあることを報せる効能があった。しかしそうではあっても、さきの200年まえへの回想はそれが「横浜の」という名辞を冠しうから聞き取られ記録されたにほかならない。横浜歴史に記されることはないが当事者にとっては切実な過去が、じつに膨大にある。そうした歴史が記される場所はいったいどこになるのだろうか。

始原が複数ありうること、開港以前のひとの生活を報せる痕跡を注意深く探査すること——かくして横浜歴史の複数の始原が実際に史誌に書かれたのだが、そこでは2万2000年まえであれ5万年まえであれ、それも「横浜の歴史」と書かれる奇妙な事態が展開してしまった。〈横浜なるもの〉がそれほど貪欲にひとびとの軌跡や痕跡を包含してしまうともいえようし、ひとびとの方も〈横浜なるもの〉に抱擁されたがるのだといえるかもしれない。しかも横浜のばあいは、〈横浜的〉な矜持と欲望がナショナルなそれと結合しやすい。両者の結合がたとえば「開港」以前の過去、「日本人」以外の業績、「横浜」以外の事績といった〈他者〉に対してそれを貶視、消去、無視するという暴力となってあらわれるとなると、横浜をめぐる歴史意識と歴史記述については注意深い考察が必要となる。

横浜歴史を記述するとき、単一の始原という歴史意識にもとづいた記述は〈横浜的〉かつナショナルな矜持と欲望の陥穽にはまりやすく、たとえ始原を複数にしてみてもいわば〈横浜なるもの〉や〈日本なるもの〉からかんたんには逃れられそうにもない。始原をもとめ、それを訪ね、それを記すこととは、まるで深い穴のごとくあって、なんびとをも誘惑して引きづり込むために開いているかのようである。そこからどう逃れられるか。

まずひとつに、当事者にとって切実な歴史をひたすら記述してゆくことをあげてみよう。当事者またはその家の、外延あるいは上級に位置する——ここでは横浜（さらに日本）——なものにも包摂されない歴史記述を増やしてゆくのである。たとえば、わたしまたはわたしの家の始まりは69年まえのこと、と書き始める歴史記述である。こうした記述を個々に増やしてゆき、いわば〈わたし史〉のモザイク状態を展開してみよう。個々の記述が統合されて通史や全体史とはならないように充分に注意をはらえば、横浜歴史も日本歴史もぐずぐずになってゆく。わたしまたはわたしの家の、外延あるいは上級に位置する〈横浜なるもの〉や〈日本なるもの〉にまつわる矜持と欲望から自由になれるかもしれない。

ところが、こうした歴史記述が当事者にとつての矜持となりうるかどうかは、じつは曖昧である。その歴史は、48年の歴史にくらべると誇

りうるかもしれないが、184 年まえを始原とする家の歴史にはひけめを感じることもあろう。69 年という家とひとの歴史が他との比較をとおして意味をもたなくなるかもしれない。ならばこそ、歴史の意味は長さなどにあるのではなく、それがどう生きられたかが肝要なのだといえよ。そうした過去への問いが個々に展開して〈わたし史〉のモザイク状態が徹底すれば、じつは歴史家の役割もなくなるだろう。過去を想起し、歴史を記述するのは当事者なのだから。そして、当時者のかかる過去や歴史にかかわる営みを禁止する資格は歴史家にはない。

だが、個々の当事者にとって切実な過去がそれとして書かれた歴史となるには隘路を通過しなくてはならない。当事者にとって個別に生きられた過去は、たしかに出来事としてみればひとまずは、個々に切実なひとつひとつとして想起される。だが、『横浜開港側面史』のべつの回想をみれば、開港前後のころの出来事が、「横浜市民」として、あるいは「日本国」にかかわる出来事として体験されたと想起されてしまう事態を目のあたりにするのだ（阿部 1999）。ひとびとのころのなかに想起された個別の過去も、それが聞き取られ記録される場が横浜開港 50 年記念事業となると、それには「横浜」や「日本」という籠^{かご}がはめられてしまう、あるいは腕枕がまわされるのだ。となるとここに歴史家が登場する余地がある。歴史家は、個々の〈わたし史〉がそれとして生きうる場を提供し、それ

が外延や上級に君臨するなにものかに包摂されることをつねに検証する役割を果たすこととなろう。

歴史家とはどのような職能のひととみられているだろうか。『横浜もののはじめ考』の見解をかりれば歴史家は、「史実性」を重んじる職人であり、おもに文書や遺物にもとづいて過去を「正しく」再構成する記述者となろう。じつは、わたしもウェブ・サイトで「横浜市き章は、明治 45 年の 50 周年を記念して…つくられた」（<http://www.city.yokohama.jp>）という記述をみて、思わず訂正をもとめる抗議の電話を横浜市に入れたそうになった。正しくは 1909=明治 42 年なのだから。さきに述べた知見が広くて注意深く書物（史料）を読むものとは、まさに歴史家のことであって、つねに「事実」を発掘して歴史を「書き直し」てゆくのは歴史家の性なのだ。現に、「横浜もののはじめ」はいくつもの版がつくられ、横浜歴史の通史も『横浜開港五十年史』（1909 年）、『横浜市史稿』、『横浜市史』、『横浜市史 II』（1993 年〜）とくりかえし刊行されている。歴史家は過去をつかさどる万能の司祭のごとくにふるまい、歴史記述の役目を独占しているかのようだ。するとつぎには、国であれ市であれ、あるいは土地や家の始まりであれ、とにかくなにか始原から書かれる歴史というありようを問いつめてみる必要がある。

かつて、ひとそれぞれに誕生日があるのに、国に誕生日がないのはおかしい——という発言

があったすえに、「建国記念の日」が制定されたのだった。「紀元節」と呼ばれたその日を、建国記念日とはいわずに「建国記念の日」と命名したこの奇怪さ。「史実性」の探求を性とする歴史家は、その日がほんとうはなにか、その日にかかわるひと（神？）と出来事が事実か否かをめぐって精緻に実証研究を展開することで、「建国記念の日」制定に反対した。しかし正確に過去を再構成する実証研究だけでは、国の誕生日がないとおかしいという動機や休みが一日増えるという歓喜に抗うことはむづかしかった。現に2月11日はいまでも「国民の休日」として休まれている。

そもそも誕生日の「誕」には「生まれる」とともに「でたらめ」「大げさにいう」という意味もあった。誕生日とは怪しい代物でもある。事実、横浜市も自己のシンボルマークの生まれた年を誤記していたではないか。それはいい加減でもよいと公言しているようなものだ。だがそれを修正してよしとするのではなく、出自や始原を問うこと自体を問おう。

歴史記述とは、あるひとびとにとっての・ある始原からの・変遷を書くことではなく、だれにとっての・その始原がなぜそれなのか・どのように出来事がつなげられたのかを批評することなのではないか。通史を描くために過去に遡って始原を確定するという歴史意識それ自体を疑おう。専門職としての歴史家とは、科学に律せられた記述であれ誇りを抱くための記述であ

れ、くりかえし書かれる「はじめ」の物語や「ひとつつながり」の物語をそのなりたちになで立ち入って添削する批評者の謂である。そして横浜歴史も日本歴史もぐずぐずになったそのときには、個別の断片としての過去の痕跡をそのままにうけ入れる不安定さや据わりの悪さを甘受する責めを歴史家は引きうけなくてはならない。

（あべ やすなり・滋賀大学）

参考文献

- 阿部安成 1997a 「開港五十年と横浜の歴史編纂—歴史叙述と歴史意識」『一橋論叢』117-2
 1997b 「横浜開港五十年祭の政治文化—都市祭典と歴史意識」『歴史学研究』699
 1998 「横浜の震災復興と歴史意識（1923—32年）」『日本史研究』428
 1999 「横浜歴史という履歴の書法—〈記念すること〉の歴史意識」
 阿部ほか編『記憶のかたち—コメモレイションの文化史』柏書房
- 岩崎稔 1998 「モーリス・アルブヴァックスの『集合的記憶』 1」『未来』377
- 岡真理 2000 『記憶／物語』岩波書店
- 小谷汪之 1987 「歴史学の自己疎外」西川正雄ほか編『現代歴史学入門』東京大学
- 立川孝一 1999 「アナール第3世代における自己破壊の歴史哲学—ルゴフ『歴史と記憶』に寄せて」『歴史人類』27（筑波大学歴史・人類系）
- 谷川稔 2000 「社会史の万華鏡—『記憶の場』の読み方・読まれ方」『思想』911
- ノラ, P 2000 「記憶と歴史のはざまに—記憶の場の研究に向けて」『思想』911（1984）、長井伸仁訳
- 森村敏己 2000 「記憶とコメモレイション—その表象機能をめぐって」『歴史学研究』742
- ル・ゴフ, J 1999 『歴史と記憶』法政大学出版局（1988）、立川孝一訳
 『歴史学研究』特集 = 過去へ向かう心, 574, 1987. 11
 『思想』特集 = 記憶の場, 911, 2000. 5

[付記] 横浜についていくつかのことを書くうちにほんとうにくりかえしが多くなってしまいました。本稿の内容もすでに発表したいいくつかの文章と重なっていますが、どうかシングルの外語 WS バージョンとして読まれ、できればさまざまな論議へと展開することを願うばかりです。